



2024

**国際理解・国際協力のための
作文・感想文コンテスト**

優 秀 作 品 集



日本国際連合協会山口県本部

Yamaguchi Prefectural Chapter of the
United Nations Association of Japan

序

国際連合(国連)は、世界の平和と経済・社会の発展のために協力することを誓った独立国が集まって設立された機関で、現在 193 ヶ国が加盟し、日本は昭和 31 年(1956 年)に加盟しました。

山口県では、昭和 27 年(1952 年)に「県民の運動として国連の目的実現に協力すること」を目的に、日本国際連合協会山口県本部を設立して以来、県民の皆様に国際社会の平和や安全をはじめ貧困等の諸問題を身近に考えていただき、国連の役割や国際理解を一層深めていただけるよう活動を行っています。

今年度の、「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」、「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」では、県内から多数の御応募をいただき、その中から、優秀な作品を選び、この作品集に掲載しましたので、ぜひご一読ください。

日本国際連合協会山口県本部

本部長 田中 マキ子

日本国際連合協会山口県本部について

主な活動内容

- ◆ 「国際理解・国際協力講演会」等の開催
- ◆ 各種コンテストの開催
 - 「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」
 - 「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」
 - 「外国人による日本語スピーチコンテスト」

ホームページ

<https://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>



国際理解・国際協力のための作文・感想文コンテスト 2024

優秀作品集目次

中学生の部 第64回 国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト

特賞（山口県知事賞）

2

「持続可能な開発目標（SDGs）の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。」

～「誰一人取り残さない」ために～

野田学園中学校 3年 齋藤 ちひろ

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）

4

「世界の平和のために私たちができることは何か。」

～ 知覧特攻平和会館を訪ねて～

照曜館中学校 2年 今村 明依

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

6

「持続可能な開発目標（SDGs）の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。」

～ 持続可能な一歩～

周南市立富田中学校 2年 稲井 悠人

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

8

「よりよい未来に向けてあなただったら国連の場で何を訴えたいか。」

～「拒否権を廃止し、公平な国際関係を築くために」～

下関市立文洋中学校 3年 北川 歩奈美

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

10

「持続可能な開発目標（SDGs）の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。」

光市立島田中学校 3年 隅 明花

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞）

12

「持続可能な開発目標（SDGs）の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。」

～ 未来の子ども達のために～

下関市立文洋中学校 2年 中本 有香

高校生の部 第31回 高校生によるSDGsに関する感想文コンテスト

特賞（山口県知事賞）

15

SDGs⑫：つくる責任つかう責任

「廃棄食材を無駄にしないために」

サビエル高等学校 3年 清水 ともか

特賞（日本国際連合協会山口県本部長賞）

17

SDGs②：飢餓をゼロに

「誰もが満足に食べられる未来のために」

山口県立下関中等教育学校 5年 坂本 美海

優秀賞（公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞）

19

SDGs②：飢餓をゼロに

「海外で実感した世界の実情」

山口県立下関中等教育学校 5年 立石 結士

優秀賞（山口県ユネスコ連絡協議会長賞）

21

SDGs②：飢餓をゼロに

「世界平和のために私たちができること」

山口県立下関中等教育学校 4年 渕上 椋鈴

特別賞（国際ソロプチミスト山口賞）

23

SDGs④：質の高い教育をみんなに

「当たり前を平等に」

山口県立下関中等教育学校 4年 久富 優樺

特別賞（山口ロータリークラブ会長賞）

25

SDGs④：質の高い教育をみんなに

「教育の充実化が成されない理由とは」

山口県立下関中等教育学校 4年 平島 義久

佳作

27

SDGs⑪：住み続けられるまちづくりを

「下関のために自分ができること」

山口県立下関西高等学校 1年 鍋田 雄佑

佳作

29

SDGs⑮：陸の豊かさを守ろう

「一人ひとりの小さな行動から」

野田学園高等学校 1年 原田 英承

第 64 回

国際理解・国際協力のための
中学生作文コンテスト

優 秀
作 品 集

特 賞（山口県知事賞）



持続可能な開発目標(SDGs)の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。

～「誰一人取り残さない」ために～

野田学園中学校 3年 ^{さいとう}齋藤 ちひろ

持続可能な開発目標、「SDGs」。私たちが住むこの地球を、持続可能でよりよいものにするために達成すべき17の国際目標だ。株式会社ロイヤリティマーケティングが行った調査では、日本国内のSDGs認知率は約80パーセントと、広く浸透していることがわかる。では、ここで一つ問いたい。皆さんは、SDGsの「理念」を知っているだろうか。SDGsという言葉やおおまかな内容は知られていても、その根本にある理念はあまり知られていないのではないだろうか。実際、SDGsや環境問題などに関心の高い私たち家族でも、うっすらと認識している程度だった。そこで、これからさらなる努力が必要な点は、人々がSDGsについて正しい知識を持ち、独自の見解をもつことだと考える。この意見について、次に述べる二つの観点から詳しく説明していく。

まずは、国際的な研究組織、SDSNが今年発表した「持続可能な開発報告書」の内容からだ。この報告書は、各国のSDGsへの取り組みの進捗状況を、目標ごとに「達成済み・課題が残る・重要な課題がある・深刻な課題がある」の四段階で評価している。今年の報告書では、日本は18位、深刻な課題があるとされたのは五つだった。そのうちの 하나가、目標12「つくる責任、つかう責任」である。この目標には、捨てられる食料の一人あたりの量を半分まで減らす、ごみが出ることを防ぐ・減らすことなどが小目標としてあげられているが、令和四年度の日本の食品ロス量は約472万トンと依然として多く、海洋産業や海の中の生態系に影響を及ぼす海洋ごみも、少なくとも年間約800万トンが新たに増え続けていると言われている。捨てられるはずの野菜や果物を利用した製品づくりや、プラスチックのかわりになる素材への置きかえなどがメジャーになりつつあるが、なぜあまり改善されないのか。私は、SDGsを正しく理解せず、危機感を持っていない一部の人たちが、改善に向けた努力をしていないからだと考える。ある行動がのちにいかに悲惨なことを引き起こすかを分かっているならば、意識せずともそのような行動はしないだろう。また、この意見の裏付けとなるのが、SDGsの達成度ランキング4年連続1位のフィンランドの人々の心構えだ。驚いたことに、フィンランドではSD

G s という言葉はほとんど知られていない。だが、冒頭で述べたSDG s の理念の「誰一人取り残さない」という考えを国民全員がしっかり理解しているのだ。これは、フィンランドの国づくりの基盤となる考えとSDG s の理念が同じだからである。そんなフィンランドでは、大学までの学費や医療費が無料で失業保険も充実している。そのかわり税率は高いが、「誰一人取り残さない」ためには必要なことだと、国民全員が納得しているのだ。

これらのことから、私は人々がSDG s について正しい知識を持ち、独自の見解を持つことに力を入れていくべきだと考える。国連や各国政府、各自治体、学校などが、それぞれ多様なニーズに合わせた規模のイベントや講演会などを開催するのが効果的なのではないだろうか。そうして人々の理解が深まれば、目標達成のための行動の効果がより期待でき、それぞれが独自の見解を持っていることによる行動の選択肢の増加から、自由度も上がるだろう。私は、自由度とは、幸福度と深く関係するものだと考える。実際、世界幸福度ランキングでフィンランドは7年連続1位だ。また、幸福度が高ければ、何をするにもその効果は大きく、持続性もあるだろう。

世界レベルでは、2020年以降進捗が停滞しているというSDG s。まずは独自の見解を持ち理解を深めることから始めてみてはどうだろうか。

特賞(日本国際連合協会山口県本部長賞)



世界の平和のために私たちができることは何か。

～ 知覧特攻平和会館を訪ねて ～

いまむら めい
照曜館中学校 2年 今村 明依

「あの花が咲く丘で君とまた出会えたら」

これは現代の女子高生の百合がタイムスリップし、そこで出会った特攻隊員の青年との恋を描いた物語です。この映画を観たのが戦争に興味をもったきっかけです。映画の中で、彰が特攻隊員として空へ飛び立つシーンがあります。主人公の百合が彰の名前を叫んだ時私の胸は張り裂けそうでした。

今年の春、鹿児島県南九州市にある知覧特攻平和会館を訪れました。訪れた理由は、私が観た映画で描かれていた特攻隊や戦争について学びたいと思ったからです。この場所は私が昔近くに住んでいた場所でもあります。公園にはたくさんの桜が咲いており、私は毎日のように広い芝生を走り回っていました。平和会館には古くて大きな戦闘機が今もあります。それを目の当たりにすると痛ましい出来事が起きた場所なんだと痛感します。

建物の中に入ると、若い特攻隊員の写真や遺品、家族にあてた手紙などが展示されていました。館内は、写真撮影が禁止されています。なので私は、目と心に焼きつけるしかありません。今までありがとうという感謝の気持ちを記したものや家族の幸せを願うものばかりでした。ここから多くの若者が飛び立っていきました。戦争で大切な家族や友人を失う悲しみは、平和な今を生きる私には計り知れないものです。世界平和のために私たちに何ができるのでしょうか。私たちにもできる事を考えてみました。

まず、「知ること」が必要だと思います。日本の戦争の歴史を知ることです。さらに今なお起きている戦争や争いごとに興味・関心を持ち、調べ、学ぶことが私たちにできる第一歩だと思います。

次に、「伝えること。」だと思います。私が知覧で話を聞いた人は高齢で、戦争当時は小さな子供だったそうです。実際には戦争を経験し、自らの口で戦争を伝える語り部の人はほとんどいなくなっています。私たちのような若い世代は戦争を知りません。しかし、実際に経験していなくても、後世に戦争の悲劇を伝えていくことは大切なことです。

最後にすべきことは、「平和について考え、行動すること。」だと思います。こ

れが最も難しく困難な事柄です。私たちにとって平和とは何でしょうか。私が考える平和とは、日常の当たり前の中に存在しているものだと思います。当たり前には毎日食べる食事がある。学校に行ける。寝るところがある。着るものがある。そんな当たり前のことが平和ということだと思います。当たり前は過去の日本には存在しませんでした。今現在でも当たり前の生活ができない国もあります。私たちには今起きている戦争や争いごとを止める力はありません。しかし、どうしたら戦争を終わらせられるかを考えなければなりません。中学生である私にできる事は限られています。そんな私がこの作文を書いて自分の思いを周囲の人に伝える。そんな小さな一歩が大きな一歩につながっていくと強く信じています。

平和会館で展示されている資料を読んでいると涙があふれてきました。悲しみは、戦争が終わり平和になった今でもまだ人々の胸に深く刻まれています。私たち日本人はもう戦争はしないと決め平和に過ごせています。一方で、今も世界各地では絶え間なく戦争や紛争が起きています。終わりのない争いが続いています。戦争の痛みを知る私たちにしかできない事があるはずです。簡単にはなくならない戦争や争いごとを解決するために、平和について考え続けることが平和につながると私は信じています。

優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)



持続可能な開発目標(SDGs)の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。

～ 持続可能な一歩 ～

周南市立富田中学校 2年 いない ゆうと 稲井 悠人

僕は訴えたい。電気を過信するなど。人々は今、電気を過信している。電気エネルギーの使用という概念の誕生から、人間の文明は、格段に進歩してきた。しかしその道は自然破壊の道であり、母たる地球の破壊の道だ。だが人類は、今日もその道を歩む。

物事の一丸化にはいい印象がある。だが、必ずしもその限りではない。一丸化されているからこそ起こる障害というものもある。電気においても、弊害が生じることも決して少なくない。例えば、停電。例えば、セキュリティ。例えば、無駄遣いの増加。その例をあげるとキリがない。電気に限っても、だ。

災害などによる停電が、混乱を生むことも少なくない。その不安感は拭えないが、それは改善も難しい。しかし、やはり一番大きいと感じるのは、無駄遣いである。今日、電気があってできないことはない。と言えれば過言かもしれないが、ほとんどのことは電気をつかえばできてしまう。これは、あまりにも便利「過ぎる」。

僕は、学校で「不便の利点」について学んだ。例えば、幼稚園の園庭に障害を設け、幼児の運動能力の向上を目指したり。旅先で交通機関より徒歩移動を重視し、その楽しみを増やしたり。その例は枚挙に暇がない。

僕は、「不便の利点」を、この電気に見出した。昨今の電化製品は、あまりにも便利だ。便利すぎると、無駄遣いが止まらない。自分だってそうだ。夏だと、特に暑くない日でもクーラーをつけてしまうことも少なくない。また、宿題をしなければならないとき。寝なければならないとき。スマホをだらだらと見てしまう。一度のみを見れば、消費する電気も時間も少なく見える。だが、一生繰り返すと考えると話は全く別だ。単純な話、80年間一日10分をスマホとのにらめっこに費やすだけで、29万分、4870時間以上を無駄にしている。これは200日を超える。電力に関しては、一年間あたりの平均金額から計算すると、80年使えば1万3200円だ。さらに、電力量単価から考えると、この電力量は426kWhだ。一般的に、火力発電で、1kgもの石炭を消費して発生する電力量は2kWhとされる。

すると、一人が80年スマートフォンを使用するのに、200kgを超える石炭が消費される。それに、実際スマホを使用するのは一人ではない。何千何万もの人が、スマホを利用する。火力以外の発電方法の存在を踏まえても、多くの資源が消費されていることの想像は容易だ。

昨今、環境負荷の対策を声高に叫ばれているのが車だ。EVの進化が著しい。しかし、僕が真に重要だと思うのは、現地の実情に応じたアプローチだ。EV一辺倒ではなく、HEV車や水素自動車などで、選択肢を富ませるべきだ。日本車の燃費の良さは、途上国の環境改善にも貢献できる。例えば、インフラの整わないアフリカ諸国では、EVの普及が難しい。そこで、燃費の良いガソリン車やHEVが重宝される。実際に、日本の中古車は、海外に多く輸出されているようだ。世界の平和と持続可能な開発のためには、画一的な解決策でなく、各国の強みを活かした協力が不可欠だ。SDGsの進捗を見ると、気候変動対策は喫緊の課題だ。だが、それは必ずしもEVへの全面的な移行を意味しない。寧ろ、技術の改善、融合によるバランスの取れた方法こそ重要だ。

私たちにできることは、まずは自分の生活を見直し、細かな所でエコな選択をすることだ。例えば、自転車を使う、短距離移動には徒歩を使う、などが挙げられる。これらの行動は、文字通り小さな「一歩」かもしれないが、きっと積み重ねれば山となる。未来のために、私たちができることを考え、行動に移していくことが必要だ。これが、「持続可能な社会」を築くための「一歩」になると信じている。

優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)



よりよい未来に向けてあなただったら国連の場で何を訴えたいか。

～「拒否権を廃止し、公平な国際関係を築くために」～

下関市立文洋中学校 3年 きたがわ ほなみ 北川 歩奈美

国際連合（国連）は、世界の平和と安全を守るために設立された組織です。しかし、国連の仕組みの中には、常任理事国による「拒否権」という問題点があります。この拒否権があるため、たった一国の反対で重要な決定が阻止され、世界の平和が損なわれることがあります。私は、この拒否権を廃止し、より公平で民主的な多数決による意思決定を取り入れるべきだと考えます。

学校で歴史を学んだ際、冷戦時代における東西の対立が、国際社会に多くの混乱をもたらしたことを知りました。特に、国連安全保障理事会での拒否権行使が、どれほど多くの紛争解決の機会を逃したかが印象に残っています。例えば、シリア内戦の問題では、常任理事国が異なる立場をとり、結果的に何度も拒否権が行使され、国連の平和維持活動が十分に機能しませんでした。

私の姉が、国連や国際法について大学で学んでいるため、家族と時々世界の平和について話し合うことがあります。その中で学んだことの一つは、意見の相違があっても、全員の意見を尊重し、多数決で物事を決めることの重要性です。もし、家庭の中で一人の意見だけで全てが決まってしまうと、他の家族は不満を感じるでしょう。同じように、国際社会でも一国だけが他国の意見を無視して拒否権を行使することは、不公平なのではないかと感じました。

社会においても、多くの人々がより公正な世界を求めていると私は考えます。国際会議やニュースを通じて、拒否権の行使がいかに多くの人々の希望や安全を奪っているかを目の当たりにしました。これが、国際社会全体の信頼を損なう原因となり、結果的に平和の維持が難しくなるのです。

私は、国連が拒否権を廃止し、多数決による意思決定を取り入れるべきだと強く思います。この提案により、国際社会がより公正で全ての国が対等に参加できる場となると考えます。例えば、気候変動対策や人道援助のような問題では、全世界の利益を考えた決定が行われる可能性が高まると思います。また、多数決による決定

は、国連の信頼性を高め、より多くの国々が協力して平和を築くことにつながると考えます。

国連が真に世界の平和と公平を守るためには、拒否権の廃止という大胆な改革が必要です。私は、国連の立場でこの変革を主張して、全世界の人々がともに協力して、よりよい未来を築いていくことを目指すべきだと信じています。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

持続可能な開発目標(SDGs)の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。

すみ あすか
光市立島田中学校 3年 隅 明花

「その棚から牛乳とって。」

私は母に言われ、棚から賞味期限のおそいものを手にとり、かごの中に入れた。すると母は、

「賞味期限のはやいものから買わなきゃだめよ。」

と言った。なぜだろう。もし賞味期限がはやいものから買ってしまったら食べきれないかもしれない。そこで残してしまったり、捨ててしまうことこそが食品ロスに繋がってしまう。私は食品ロスのことについて興味をもった。

さっそく帰って調べてみると、世界ではまだ食べられるはずの食料が約13億トンも廃棄されていて、そのうちの日本では、約600万トンも廃棄されていることが分かった。その中でも国民ひとりあたりに換算すると、毎日お茶碗1杯分の食料を捨てていることになるそうだ。

私は調べてみてびっくりした。日頃から自分達の国や生活の中でどれだけ食べ物を無駄にしているのか。考えたこともなかった。

最近ではスーパーやコンビニエンスストアなどにも賞味期限のはやいものには割びきができるようになった。その割びきシールには、「食品ロスにご協力いただき、ありがとうございます」と書かれている。昔は割びきシールのはってあるものを買う人は「貧乏くさい」という、勝手な偏見があった。でも今は割びきされている商品を買うことで、食品ロスを減らすこともできるし、少し安く買うことができ大変お得だ。

他にも食品ロスを減らすために色々なことができるようだ。食品を多く買いすぎないことや、野菜などの茎や葉の捨ててしまう部分をできるだけ調理して食べる。外食などをしたときは、食べきれなかった物を持ち帰ることができるサービスなども最近が増えてきている。

私は最近食品ロスだけでなく節水を心掛けている。節水を気に留めるようになったのは、小学校6年生のころ、節水について学び、その時から節水について考えるようになった。

たとえば、お風呂の残り湯で洗濯をしたり、手を洗うときには水を出しっぱなしに

しない、油汚れが目立つ食器には、紙で油分を拭き取ってから洗ったり、食品ロスと同じように、些細なことから、気をつかうと世界のためにもなるし、自分たちも、得をしたいと思います。

詳しく調べてみると、世界では安全に管理された水を得られない人は約22億人、安全に管理されたトイレを利用できない人は、約42億人もいるとされています。自分は安全な水を使えているから節水をしなくてもいいというわけではなく、世界の現状を知り、自分たちには何ができるのかを考えることも大切だと思う。

今回は、SDGsの2番目の目標である、飢餓をゼロにと、6番目の目標である、安全な水とトイレを世界中にという目標について考えてみた。「どうせ私一人がやったって」と思ってしまうかもしれないけどたくさんの方が食品ロスを減らそう、節水をしようという気持ちがあり、行動していけば、日本だけではなく、世界中の人々が豊かに生活して、これからも地球で生きていくことができると思う。食品ロスと節水だけ心掛けたところで世界は変わらないかもしれない。だけど少しずつ、日本の今、世界の今、自分達にできることは何かと興味を持つだけでも世界に貢献できると思う。この先すぐではないかもしれないけど、これからもずっと地球で暮らせるように、すべての人が、満足して食事ができるように、賞味期限のはやいものから商品を買ったり、限りのある水という資源を大事に大事に使って、すべての人が、きれいな水を使い続けられるように、地球に優しくして、この地球ですっと生きていきたいな、と思った。

特別賞(山口ロータリークラブ会長賞)

持続可能な開発目標(SDGs)の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。

～ 未来の子ども達のために ～

なかもと ゆうか
下関市立文洋中学校 2年 中本 有香

皆さんは、毎日元気に学校に行っていますか？私は行っています。そして、充実した教育を受けていますか？私は受けています。

世界では、6～17歳の子どもの6人に1人にあたる2億5800万人が学校に通っていません。また、読み書きのできない人の3分の2が女性です。さらに、例えばエチオピアの農村部では、子どもの47%が中学校に通うことができません。そして、障害のある子どもは約98%が学校に通うことができません。世界では障害のある子どもは、障害のない子どもより2倍学校に通うことができません。日本では障害があるか無いかで、学校に通えるか通えないかということは、ほとんどないようです。障害のある子どもと障害のない子どもが、可能な限り共に教育を受けられるように、多様な学びの場が整備されています。

世界での教育格差の第一の原因は、貧困だということが分かりました。しかし、貧困を改善するだけで、たくさん子ども達が学校に通える訳ではないようです。例えば、男女差別等、「男は仕事、女は家事」と昔からの風潮が関係しているようで、女性は勉強しなくてもよいという国もあるようです。

日本の教育格差には、「学校間格差」つまり、入学する学校によって受けることのできる教育の質に差が生まれる格差、「家庭環境による格差」生まれ育った環境要因や個人の社会的な属性によって生まれる格差、「学歴格差」等があるようです。しかし、日本では読み書きのできない人や、毎日学校に通えない人は少なく、教育環境が整っていることが分かりました。義務教育の学校では教科書を無償で配布しています。これは、他国では当たり前ではないようです。その上、内容も質が高く、カラー印刷で写真や挿絵が美しく、副教材にも力を入れています。そういう意味では、日本の教育は恵まれているのだと思います。

私が、この教育格差の問題を知り、少しでも教育格差を減らすためにできることを考えました。一つ目は、「知ること」です。世界中で起きている問題を引き起こす最も大きな原因は、人々の「無関心」であると言われています。だから、「知ること」

はとても大切なことなのです。二つ目は、「伝えること」です。私は、様々な問題について知ることと同時に、多くの人に発信することも重要だと考えます。例えば、「知ったこと」を友人に伝えれば、問題を知った人が2倍になります。さらに、SNS等に投稿し、発信すれば、その数は十倍、百倍、計り知れない数になります。今や一億総発信時代とも言われています。私たちの発信が、誰かを突き動かし、大きな力になるかもしれないのです。三つ目は、「寄付をする」ことです。社会の仕組みは簡単には変えることはできません。しかし、お金の流れは変えることができ、その変化を起こすことで、今ある教育格差問題の解決に少しずつでも近づくことができると思います。

これからは、地域や日本・世界の様々な出来事を、興味のある問題だけでなく、幅広く知る努力をしたいと思います。そして、伝えたいと思います。ただし、インターネット上で情報発信する場合には、内容を十分に吟味し慎重に発信したいと思います。さらに、私が将来仕事に就き、収入を得るようになった時には、未来の子ども達のために、積極的に寄附をしたいと心に刻みました。

第 31 回

高校生によるSDGsに関する
感想文コンテスト

優 秀
作 品 集

特 賞（山口県知事賞）

SDGs⑫: つくる責任つかう責任

～廃棄食材を無駄にしないために～

しみず
サビエル高等学校 3年 清水 ともか



私と友人は食べるのが好きで食材についても興味があった。そこで学校で募集していた学生自身が挑戦してみたいことについて計画・実施・活動をし、探求する企画の「やまぐち若者マイプロジェクト」に参加して、色々掘り下げてみたいと思った。そこで私たちの活動のサポートをしてくださるメンターさんと会議をしたり、インターネットで調べたりして食品関連の情報を集めていった。活動を進めていくにつれ、世界中でたくさんの廃棄食品があることを知り、そのあまりの多さに愕然としてしまった。そしてSDGsの「つくる責任・つかう責任」に従って「食品ロス」という問題について何か取り組みたいと考える様になった。

まず農家の方を探して、廃棄野菜が出た場合はどうされているかお話を聞きたいと思い、「はぶてるマルシェ」というイベントに行ってみた。そこで、地元で大きな農場を営んでおられる花の海さんと出会った。花の海さんに私たちが行っている活動を説明して、廃棄野菜について詳しく教えていただきたいことや、もし廃棄野菜をいただけるのであれば、それを使って何か作り、地元の人々に提供してみたい旨を伝えた。すると、私たちの考えに賛同してくださり、提供を約束してくださった。後日、話し合いをするために花の海さんを訪問した。そこで、花の海さんの廃棄野菜が出ないようにするための工夫や、販売不可能な食材が出てしまった場合の取り組み等、詳しくお話を聞いた。また地元の人たちにどの様な形で提供するかについても話し合いをした。その時点ではまだ、どんなものを作るのか、いつ開催するか等、具体的なことは何も決まっていない状態だったが、「冬のうちに開催したい」「温かいものを作りたい」と考えていた。そこで花の海さんから、地元の山陽小野田市殖生や津布田を活性化させる活動を行っておられる、はぶてるさんを紹介していただき、責任者である久保田さんと話し合いを行った。この話し合いでは、久保田さんたちが行っておられる活動や地域活性化について、またこれを実行するために必要なことについてもお話を聞いた。私たちはこの話し合いの中で、食品ロス問題だけでなく地域の過疎化問題も同時にアプローチできることに気が付いた。そして「食品ロス」と「地域活性化」という二つの問題に取り組むことにした。

計画としてまず、食べられるのに捨てられてしまう廃棄食材を使って新しく食品を

作る。そして、そこで作ったものを地域の方々に提供するイベントを開催することで、地元の人が集まり、地域活性化に繋げるというものだ。花の海さんは、様々な種類の廃棄野菜の提供が可能だと言ってくくださったので、温かくてたくさんの野菜を使うことができるポトフを作ることに決定した。前日準備では会場である埴生漁港の調理室への野菜の運搬、調理器具の確認等を行い、また当日は人手が必要だったため、校内からボランティアを募り、はぶてるの方や友人、家族等約15名で活動した。結果約100人分のポトフを配付することができた。そしてそのイベントで食品ロス問題や私たちの活動について地域の方に知ってもらうため、イベント前に山陽小野田市の回覧板に広告を掲示した。当日には食品ロス問題についてまとめたポップを掲示した。配付時には、地元の方々から応援や感謝の言葉をたくさんもらい、喜んでもらったことがとても嬉しく、疲れも吹き飛んだ。毎年開催して欲しいとの声もあり、自分たちの活動はほんの小さな取り組みだが、これが食品廃棄について考えてもらえるきっかけになることを願っている。

狭い規模でもたくさんの廃棄食品があるのであれば、世界規模で考えると途轍もない量の食品ロスがあるということが考えられる。私たちは日々、当たり前のように食材を消費しながら生活している。そのせいで食材が手に入ること、食事ができることの大切さを忘れてしまうことがある。しかしその食品たちは私たちが手にするまでに多くの時間や手間がかかっていて、生産者の想いも込められている。そう考えると無駄にはできないと思う。私は買い物に行くときは値下げ商品を見るようにしている。私も気に入ったものがあれば値下げ商品を購入するが、それでもたくさんの商品が売れ残っているのを見かける。これから買い物をするときは必要なものだけを購入する、賞味期限、消費期限以内に消費する、また食べきれない場合には知り合いや近所の人におすそわけする等、食品を無駄にしない様に工夫し、責任を持って生活していきたい。そして、食べ物があることを当たり前だと思わず、感謝していただくことを忘れないようにしたい。私たちひとりひとりがこのような意識を持つことで、食品ロスという問題を緩和させることができるだろう。少しでも明るい未来への実現に向かうことを願っている。

特 賞(日本国際連合協会山口県本部長賞)

SDGs②: 飢餓をゼロに

～ 誰もが満足に食べられる未来のために ～

山口県立下関中等教育学校 5年 さかもと みう 坂本 美海

私は、持続可能な開発目標のうち、「2 飢餓をゼロに」の学校での学習や体験について述べる。

まず、「飢餓をゼロに」は、「飢えをなくし、誰もが栄養のある食料を十分に手に入れられるよう、地球の環境を守り続けながら農業を進めよう。」というものである。具体的な目標として、「飢餓を終わらせる」「食料安全保障の達成」「栄養を改善する」「持続可能な農業を促進する」ということが設定されている。

私は学校行事でカナダに語学研修に行った。その時、カナダの学校で「ゼロハンガー」についてたくさんのことを学んだ。飢餓問題の現状やカナダでの取り組みなどについてだ。

中でも驚いたのは、食べ物、フードバンクが必要な人のほとんどはホームレスではないということだ。仕事を持っていて、住む場所を持っているにも関わらず、自分自身や家族のために栄養価の高い食べ物を買うのに十分なお金がない人がいるということだ。例えば、「薬の代金を支払うか、空腹感到耐えるか」や「食事を楽しむか、家賃を払うか」といった究極の選択を常に迫られている人々が大勢いるということを知った。家賃や医療費を支払うために極端に食事を制限するという事は日本ではあまりないことだと思った。

また、日本では極端なダイエットをする人が多くいる。それは、自ら食事を制限している人がいるということだ。つまり、何をどれだけ食べるか自分で選択できるほどに食べ物に恵まれているということだと思う。この恵まれた環境が、私たちの飢餓への危機感の欠如に繋がる原因になっていると考える。

また、飢餓のサイクルという問題もとても考えさせられた。慢性的な健康問題により、若者は学校から遠ざけられ、大人になった時、教育の欠如により、働く能力が制限される。そして、妊娠中の健康状態の悪さは、栄養不足の子供の出産に繋がる。さらに、栄養不良は肉体的及び精神的な発達を阻害する。これらは、負のサイクルになっているのだ。

飢餓が一生誰かに負担をかけ、次の世代に引き継がれていることは知らなかった。

サイクルし続けられないために、すぐに解決する必要があると感じた。しかし、負のサイクルを止めるためには、全ての世代に、栄養価の高い食べ物を十分にいきわたらせ続けることが必要である。そのために、大量の食べ物を継続的にすぐに手に入れられる状態にするというのは大変であると思った。

学校で飢餓について学んだ後、実際にフードバンクを訪れた。フードバンクには想像していたよりもたくさんの食べ物があった。それらの寄付は、個人、組織、企業からきており、政府からは資金を受け取っていないと聞いた。人々の敬意や思いやりから成り立っているということに素晴らしいと思った。私が訪れたフードバンクは40年経った今も多くの人々を助け続けている。フードバンクの成功にはボランティアが不可欠であると感じた。

私は、カナダで飢餓について学ぶまで、飢餓人口が増えている現状すら知らなかった。私たちは、いつも当たり前にご飯を食べている。そのため、世界での飢餓問題について深く考えたり、危機感を抱いたりする場面はあまりない。あの時学んでいなければ、私は飢餓について何も考えることなくご飯を食べていただろう。今は、食べ物に恵まれていることに感謝しながら毎日ご飯を食べることができている。カナダでのこの経験は、私にとって、とても貴重なものであった。

世界の人口は年々増え続けているが、約8億人以上の人が満足な食事ができずに困っている。栄養が足りないと、病気になったり、子供が成長しなかったりと多くの健康問題が生じる。

日本では、一年間で約500万トンの食べ物が、作りすぎや好き嫌いなどの理由から捨てられている。つまり、食べられるのにゴミになっている食べ物がたくさんあるということだ。世界には、十分に食べ物が手に入らない人々がいるにも関わらず、食べ物に恵まれている国や地域では、食品ロスが問題になっている。このロスをなくしていくことが私たちには重要であり、最優先であると思う。

また、世界の国々、地域でより協力し合うことが大切だと考える。例えば、食べ物に恵まれている国や地域はもっと積極的に学習会などのイベントや募金活動を行う必要があると思う。まず、知るきっかけを与えることが大切であると思う。また、お金の寄付だけでなく、食べ物自体を外国に気軽に寄付できるようになると良いと思った。

日本は低所得者が少なく、食べ物に恵まれており、フードバンクも少数である。そのため、多くの人々が飢餓問題を身近に考えてはいないだろう。私たちが、もっと真剣に飢餓問題と向き合うことが解決に繋がっていくと私は考える。

優秀賞(公益財団法人山口県国際交流協会理事長賞)

SDGs②: 飢餓をゼロに

～ 海外で実感した世界の実情 ～

たていし ひとし
山口県立下関中等教育学校 5年 立石 結士

「きれいに食べるね」と、食後の私はよく言われる。子供のころから食べ残しは絶対にしない、と自分の中で決めている。そんな私は今年の冬に、語学研修でカナダに行った。2週間ホームステイをしたのだが、やはり日本との違いが多く、戸惑うことの多い期間だったが、とても良い思い出だ。知らない環境の中で、新たに学ぶことがたくさんあった中でも、特に印象的だったのは、持続可能な開発目標の2番目である「飢餓をゼロに」についての学習だ。最初に、世界の飢餓の現状を学んだ。世界では、10人に1人の人が飢餓に苦しんでいる。これを聞いただけでは、実際にどのくらいの方が飢えに苦しんでいるのか、あまり想像がつかなかった。また、カナダで学ぶまで、私はこの目標を、食べ物のない人たちをゼロにしようというだけの単純な問題だと思っていた。しかし、この目標のターゲットには栄養不良の人たちも含まれており、複雑な現状を孕んでいた。カナダでは、栄養不良が原因で働けず、十分な収入を得られない人が栄養不良の子供を産み、その子供もまた十分な栄養を得られないまま大人になり、収入を得られず栄養不良の子供を産むという負の連鎖が起こっていると知った。ここでのキーワードはファストフードだった。ファストフードは安価である。しかし、体に良い食べ物ではない。そのため、収入の低い人々はファストフードを中心とした食生活になってしまう。食べ物を得られても、栄養価の高いものでなければ、この目標の本当の達成にはならないと知り、驚いた。SDGsについて学んできたつもりではあったが、やはり世界の実情を知らなければ、本当の問題をとらえることができないなと思った。後日、カナダのフードバンクの施設に訪れた。そこには、寄付によりたくさんの食べ物が集まっていた。これだけあればカナダ国内の食糧問題は解決できるのではないか、と思われるほどの数だったが、それでもまだまだ足りないそうだった。それを聞いて、世界の食糧問題の深刻さを感じるとともに、毎日十分に食べられている生活が、どれほどありがたいものなのかを思い知った。最初にも述べた通り、子供のころから食べ物のありがたさは知っているつもりだった。しかし、それだけでは足りないのかなあと思った。こうして実感することにより、本当のありがたみや貴重さがよく分かったからだ。

カナダでの語学研修だけでなく、韓国へ旅行に行った際にも、世界の問題を目の当たりにする機会があった。韓国の釜山にはたくさんの観光名所がある。たくさんの人で賑わう市場は、活気で溢れていた。夜にはきれいな夜景が見られ、裕福な町という印象を受けた。しかしある時、駅前でおこなわれていた炊き出しに並ぶ、長蛇の列を発見した。裕福に見える部分は、釜山のほんの一部であり、その中にもカナダで学んだように食べ物に困っている人々がいるのだ。カナダで感じた世界の食糧問題の深刻さを目の当たりにした瞬間だった。

このような経験を通して、私はより一層フードロスをなくそうと生活をしている。食べ残しをしないことはもちろん、食べきれぬ量を買ったり、買い物の前には、家族と必要なものを共有したりしている。世界の問題を実感することにより、一層自分ができることをできる限りやろうという気持ちが芽生えた。百聞は一見に如かずというが、本当にその通りだ。知ったつもりでいても、それだけでは足りないところがあると思う。実感することで、その問題の重大さが分かり、少しでも解決への力になりたいという気持ちになる。この気持ちが集まるのが、持続可能な開発目標の達成に最も重要な力だと思う。しかし私たちは恵まれた環境の中で生活をしていて、なかなか世界の問題について、その深刻さを実感する機会はなかなかない。だからこそ、世界の隅々までにアンテナを張り、そこで起こっていることを知り、想像することが私たちにできる、最も簡単なことだと考えた。私自身、17ある目標の中の一つについての実感を得たのみだ。世界には十人十色の問題がある。その一つ一つに対して想像を膨らませながら、自分の生活に感謝し、できることを考えて、少しでも2030年までの目標達成に貢献したい。

優秀賞(山口県ユネスコ連絡協議会長賞)

SDGs②: 飢餓をゼロに

～世界平和のために私たちができること～

山口県立下関中等教育学校 4年 ふちがみ かりん 渕上 栞鈴

SDGsの目標の②番である『飢餓をゼロに』に対して、私が具体的に実践したことや考えたことを述べます。

私は最初に、飢餓をゼロにする難易度について調べました。SDGsの中でも、この問題は達成するのが非常に難しく、世界で9人に1人は飢餓状態が今でも続いています。農林水産省によると2050年には人口増加により、食糧の需要量が今までの1.7倍になると言われています。これは世界的な問題であり、日本も例外ではありません。日本は比較的、飢餓について問題重視されていないイメージがあり、私も実際このことを知るまでは、日本は安全な国だという固定概念がありました。しかし、そんな過酷な問題が身近にあるとは思ってもよらず、他人事ではないということを突きつけられました。

2030年に達成を目標にしているSDGsですが、このままでは、その年になるまでに問題解決は厳しいと考えます。理由は、地球温暖化の影響で年々気温が上がり、それにより食糧の収穫率が段々と下がっているからです。食物の不作は、景気が悪くなると共に、世間に飢餓状態を与える原因となります。更に、戦争が未だ世界の片隅で続いている世の中で、人々が十分に食料を確保することは難しいと言えます。しかし、世界の人間が望むのは世界平和です。現在では、フードバンク、飢餓問題に取り組むNGO(非政府組織)に寄付することや、自分が食べられるだけの食料を購入し、食品ロスを削減することなど、私たちに手が届く範囲でSDGsに貢献することができます。

そして私は、飢餓という状態がどれだけ過酷なのかを理解するために、実際に一日何も食べない日を設けてみました。これによって、食べ物が手に入らない苦しさや、空腹が続くとどれほど辛いかを身をもって体験しました。たった一日でも、食べ物が無い状態で過ごすことがどれほど精神的にも肉体的にも厳しいかを実感し、飢餓に苦しむ人々の状況に少しでも近づけたように思います。このような経験を通じて、飢餓問題の深刻さを改めて認識し、他人事ではなく、自分自身の問題として捉えることの

重要性を強く感じました。

この経験をきっかけに、私は個人としてどのように飢餓問題に取り組むべきかをさらに考えるようになりました。飢餓の問題は、私たちの想像を超えるほど深刻であり、個人の力では到底解決できないように思えます。しかし、だからこそ私たち一人ひとりができることを積極的に行い、小さな変化を積み重ねていくことが必要です。

これから私たちが手軽に取り組める行いとしては、まず、持続可能な食材を選ぶことです。例えば、SDGsの支援をしている企業のフェアトレード商品を買うことや、環境に配慮した農法で生産された食材を選ぶことです。これにより、生産者に正当な報酬が支払われ、彼らに十分な食料が確保できます。こうして、発展途上国での飢餓問題に間接的に貢献することができるのです。また、飢餓問題に対する啓発活動も重要だと感じています。SNSやブログを通じて、自分が学んだことや感じたことを発信し、多くの人々に飢餓問題について知ってもらうことができます。特に若い世代に対して、持続可能な未来のために今からできることを考え、行動するよう呼びかけることが大切だと思います。

このように、小さな一歩を積み重ねることで、私たちは飢餓問題の解決に少しでも近づくことができるのです。SDGsの目標である『飢餓をゼロに』ですが、この問題を達成することは容易ではありません。しかし、私たちが日々の行動を見直し、協力し合うことで、達成への道のりが少なからず見えてくるはずです。

私はこれからも、まず自分にできることはないかと考え、より良い社会を作るために実践し続けたいです。そして、他の人々にもこの問題に関心を持ってもらうよう働きかけていきたいと思っています。私たちが共に手を取り合い、未来の世代に飢餓のない世界を残すために、持続可能な行動を続けていくことが大切です。2030年という目標年を迎えるまでに、少しでも多くの進展を遂げられるよう、今後も広範囲に物事を考え、社会に貢献していきたいです。

特別賞(国際ソロプチミスト山口賞)

SDGs④:質の高い教育をみんなに

～ 当たり前を平等に ～

山口県立下関中等教育学校 4年 ひさとみ ゆうか 久富 優樺

毎朝六時に起床して学校へと向かう。そして、友達と何気ない挨拶をかわす。チャイムの音と同時に授業が始まり、ここから私の一日は始まる。これらは、誰もが毎日経験しているものだと思っていた。しかし、世界ではまだ「教育」という言葉が行き届いていない場所もあるのだ。

世界人権宣言・第26条に「すべての人は、教育を受ける権利を有する。」とある。実現することは出来ているのだろうか。自由な外出も許されず、教育を受ける権利などないと言われている遠い国の子どもたちにこの宣言は届いているのだろうか。私たちや教育を受けることが出来ている国民の考えがあまりすぎると私は感じている。ここで、私の体験を基に三つの提案をする。

私は十歳の頃、フィリピンに旅行に行ったことがある。私と同じ歳くらいの子どもたちが学校に通っているのを見た。制服を着て、カバンを持っている。日本でも見られるような光景だった。しかし、その近くで、何人かの子どもたちが、水の入ったバケツを運んでいた。その子どもたちは、貧困が理由で、学校に通うことができなかったのである。すぐ近くで、学校へと向かっている子どもたちもいれば、家の仕事を手伝っている子どもたちもいる。同じ場所で、住む世界が異なっている子どもたちに私は驚愕した。その様子にたえることができなかった私と母は、少しだけ話せる英語を頼りにお手伝いを一緒にした。

私は、スラム街や難民の人たちだけに目を向けていても、世界は変わらないと感じた。ここで、一つ目の提案は、教員免許を持っている人たちを募り、教育を受けることが出来ない地域に派遣をすることである。少しでも多くの子どもたちが、教育というものに触れることが出来ると思う。

最近、スーパーの前や駅で、寄付をする場所が設けられているのをよく見る。「ご協力お願いします。」この声が響きわたっている。その中で、見てみぬふりをする人や「うるさい」と怒鳴りつける人もいる。私はとても胸が痛くなった。10円でも

100円でも小さな金額でもたくさんの人の協力があれば、一人でも多くの人のお手伝いをすることができると思う。二つ目の提案は、地域、町内で開かれる会議などで寄付をする場を作ることである。寄付の活動を知らない人たちに、知ってもらうのとともに、より多くの人たちに意識を向けてもらえらると思う。私は、実際にマンション内の住民で行われる会議に出席して寄付制度を設けてもらおうと思う。

「まだ未成年だから。」「その国は遠いから。」など無責任な発言をするのが一番良くないと思う。年齢や場所は関係ない。みんな一つの世界の中で生きているのである。

私は、どちらかと言えば勉強が好きな方ではない。たまに、憂鬱に感じたり、机に向かいたくないと思うことがある。けれど、そのような気持ちは、とても贅沢でありがたいことなのだと思う。そして、最後の提案は、私たちが遠い国の子供たちの純粋で生き生きとした気持ちを受け入れることだ。とても抽象的な提案かもしれない。けれども、私は、三つ目の提案が一番大切なことだと思う。具体的な策や実行することも必要なことだけれど、まずは、受け入れることだ。気持ちがないのに策を考えても、良い考えは思いつかない。受け入れることが出来ていないのに実行しても、みんなを笑顔にすることは難しい。何か出来ることはないだろうか考える前に遠い国の子供たちの気持ちを受け取り、分かち合うことが大切だ。

私は勉強がしたくない。遠い国の子供たちは勉強がしたい。私は学校に通うことができる。けれど、通うことができない人たちもいる。同じ世界の中でも、このような差が生まれてしまう。私たちは、時間、生活が限られていて、知らないこともたくさんある。しかし、「権利」というものは、誰もが知っていて、誰もが持っている。その「権利」をみんなが、自由に使い、羽ばたくことが出来るようにと私は思う。

やりたいことが好きに出来る、行きたい場所に好きに行くことができる。述べたこれらの考えは、とても小さなことかもしれない。けれど、その小さなことが世界に伝わって、よりみんなが一つになることが出来るように私は願っている。「誰一人取り残さない」世界を作ることが出来るように。

特別賞(山口ロータリークラブ会長賞)

SDGs④:質の高い教育をみんなに

～ 教育の充実化が成されない理由とは ～

山口県立下関中等教育学校 4年 ひらしま よしひさ 平島 義久

日本国憲法第26条第2項には、「すべて国民は、法律の定めるところにより、その保護する子女に普通教育を受けさせる義務を負ふ。義務教育は、これを無償とする。」と記載されている。つまり私たちは、特に何もすることもなく小中学校での学校生活を過ごすことができるのだ。他国からしたら、ありえないことであろう。

しかしながら、SDGsの目標4には、「質の高い教育をみんなに」というものがある。さらに、この問題は中々解決の方向に向かっていっていない。では、どのような問題が解決を妨げているのだろうか。まずは、教育を受けていない場合がどのようなものがあるかを考えていく。

一つ目に、国の情勢による場合がある。例としては、戦争や紛争によるものだ。現在も続いており、終戦がいつになるかわからないウクライナ戦争では、民間の死者が2万人を超え、その中で、子供の死者数は600人近くに上っている。また、戦争が起きている場所で身を潜めており、とても教育を受けられる状態ではないという子供もいるだろう。

またこの問題はウクライナ戦争だけではなく、世界各国で起こっている数多の戦争や内戦で同じようなことが起こっている。

私は、英語の授業でシリア内戦中に国外に情報を発信し続けた女の子についてのお話を読む機会があった。その中の文章で「彼女は勉強することが大好きだった。しかし、市民戦争によって、学校が破壊されてしまい、勉強ができなくなった。」というものがある。内戦という絶望の中懸命に行動をし続けた彼女の勇姿に心を打たれたが、それと同時に戦争により大切なものを失うことへの恐怖や悲しみを強く感じた。

国民はあくまでも国があるからのものである。私は、その国の方向は、国民とほかの国の二段構えで修正できる仕組み作りが重要だと考える。

二つ目に、家族状況による場合がある。これに関して分類すると、学校などの教育機関に行こうと思ったら行くことができる可能性があるパターンと行きたくても行

くことができないというパターンに二分化されると私は考えた。

前者の例を挙げると、複雑な家庭環境や周りからの影響によって、学校に行くことが難しくなっているというものがある。親による家庭内虐待や学校でのいじめなどだ。私は、この問題の解決は、世界でどうにかするというより地域社会などの狭い範囲で解決すべき問題だと思っている。

後者の例としては、学校がそもそもない場合や時間や資金など学校生活を送るために必要となるものが十分になく、学校に行く余裕がないというものがある。この問題はアフリカを主体とした発展途上国に多く見られてよくテレビで放送されており、私も見たことがある。その番組によると不就学児が最も多い地域のサハラ以南アフリカでは約3人に1人の子供が学校に行っていないというデータが出ているようだ。また、このような地域では、そもそも親が子供をわざわざ莫大なお金や時間をかけて学校へ通わせる価値を見出せずに、働いてもらったほうが良いという考え方をする人も数多くいるらしい。しかし、先進国も発展途上国の教育充実化に息巻いているが、うまくいっていないのが現状だ。

このように、目標4「質の高い教育をみんなに」という目標の達成は、解決していかなければならない問題の方向性が多岐にわたることで、なかなか近づいていってないということが様々な視点からこの問題について吟味することであらわになってきた。また、この問題を解決しようとする、一つ目でいうと目標16「平和と公正をすべての人に」について、二つ目でいうと目標1「貧困をなくそう」について、などのようにその他のSDGs目標を同時に解決していく必要があるということが分かった。

私は、今までこの目標に関して、教育機関をもっと増やしていけばいいじゃないかと楽観的に考え、すぐに解決するものだと考えていた。ただ、それは大きな間違いだということに気づかされた。SDGsの目標達成はこんなにも複雑で険しい道なのだ。

ただ、これは目標達成の難しさを表しているのと同時に希望も表していると私は考えている。なぜなら、17の目標それぞれが密接に絡み合っているのならば、どれか1つでも解決されたとき、芋づる式に解決していく可能性が高いということを示唆しているからだ。

私もSDGsのどれかの解決に向けて力を尽くしていきたい。その尽力がいつか世界の進歩へとつながることを願って。

佳作

SDGs⑪:住み続けられるまちづくりを

～ 下関のために自分ができること ～

なべた ゆうすけ
山口県立下関西高等学校 1年 鍋田 雄佑

私が選んだテーマは「住み続けられるまちづくりを」です。このテーマを選んだ理由は今下関で急速に少子高齢化が進行しているからです。私が暮らしている吉見では、私が小学生のころに比べて子供の数が減り、高齢者が増えたように感じます。このような問題を解決するために企業がどのような対策をしているのか調べてみました。私が興味を持った制度が、「多様就業型ワークシェアリング」です。この制度を導入することで、個々のライフスタイルやライフステージに応じた働き方を実現することができます。私がより感心した点は、労働者だけでなく、この制度を導入した企業にもメリットがあるということです。長時間労働のために従業員の勤労意欲が低下し、仕事の効率が落ちてしまうという問題を解決することにつながります。つまり、「多様就業型ワークシェアリング」により企業は、生産性の向上という効果を得ることができるのです。現在働き方にも多様化が見られます。私は、フルタイム勤務一辺倒の働き方ではなく、働いている人の生活様式に応じた様々な働き方を認めていくことが大切になると思います。次に、私たち高校生が「住み続けられるまちづくりを」を達成に導くためにできることについて考えました。一つ目は、XやInstagramなどのSNSサービスを利用し、地域の魅力について国内だけでなく、世界に発信することです。下関には住吉神社や赤間神宮などの歴史的建造物、角島大橋やみもすそ川公園などの魅力的な観光スポットが数多くあります。しかし、市街の人はもちろん、下関に住んでいる人もあまり下関の魅力について知りません。そのため、初めに一人でも多くの人に下関の魅力を知ってもらうことが重要です。投稿する写真に添えて、自分が実際に行ってみて驚いたこと、感動したことなどが書かれた文章を載せることで、その投稿を見た人に興味を持ってもらいやすいと思います。なぜなら、写真だけの投稿やホームページに掲載してある情報を引用するだけの投稿では魅力が伝わりづらいからです。私はグローバル化が急激に進んでいる今だからこそ、SNSを効果的に使用する必要があると思います。二つ目は、自分の住んでいる地域の活動に積極

的に参加することです。私が住んでいる吉見では、毎年、海岸の清掃活動や神輿が行われています。これらの活動は、幅広い年代の人と関わりを持つ良い機会です。私は、小学生の頃からこれらの活動に参加しています。初めて海岸の清掃活動に参加したとき、私は内気な性格だったため、なかなか人に話しかけることができませんでした。しかし、地域の方々や学校の先輩などが優しく話しかけてくれたおかげで、楽しみながら作業ができました。それから、毎年、地域の活動に参加することが楽しみです。全員で楽しみながら作業を進めていくために、私は、多くの人に積極的に話しかけています。初対面の人に話しかけることは、勇気が必要なことだけど、その分、多くのことを学ぶことができます。去年に清掃活動で話をした近所の方は、私と共通の趣味を持っていたので初対面でも話が盛り上がりました。このように、地域の活動に参加することは、地域を盛り上げるだけでなく、人間関係を築くチャンスでもあります。だから、積極的に参加して、恥ずかしがらずにたくさんの人に話しかけてほしいと思います。三つ目は、地域の祭りや文化祭に協力することです。これまで、私は、祭りや文化祭に行ったことはあっても準備や運営に携わったことはありません。しかし、今後は、地域の一員として自分ができることを見つけて、協力していきたいと思います。吉見では、秋に文化祭があります。そこでは、吉見の小学生や中学生が描いた作品が掲示されます。その作品の掲示を協力して、地域を支えていきたいと思います。「住み続けられるまちづくりを」のために私ができることは、意外にたくさんあることを知りました。また、今当たり前にしていることが地域のためになっていることを知り、うれしく思いました。今まで行ってきたことはこれからも欠かさずに行っていきたいです。この作文で述べたことは、実際に行動に移し、改良を重ねてより良いものにしていきます。最後に、「住み続けられるまちづくりを」を達成するために行動するにあたって大切なことは、今まで自分を育ててくれた地域に感謝することだと思います。なぜなら、日頃から地域に感謝することで、地域に恩返しをしようという考えになるからです。

佳作

SDGs⑮:陸の豊かさを守ろう

～ 一人ひとりの小さな行動から ～

はらだ えいすけ
野田学園高等学校 1年 原田 英承

持続可能な開発目標（SDGs）は、2030年までに達成すべき17の目標を掲げています。これらは、世界中の人々がより良い生活を送り、地球環境を守るための道しるべです。高校生として、私たちもこれらの目標に向けて小さな行動でも起こすことができます。今回は、その中から目標15「陸の豊かさを守ろう」に着目して、自分たちがどのように貢献できるかを考えてみます。

SDGsの目標15「陸の豊かさを守ろう」は、地球上の生命を支える自然環境の保護を目指しています。この目標は、森林、湿地、山岳、草原といった陸上生態系の保全と回復、生物多様性の保護を求めており、私たちの未来にとって非常に重要です。

まず、私たちができる第一歩は、自然に対する理解を深め、身近にある自然を大切にすることです。私たちは普段、自然環境と直接的に接する機会が少ないかもしれませんが、実際には私たちの身の回りには公園や河川、学校のグラウンドなど、さまざまな自然環境が存在しています。これらの場所に目を向け、定期的に散策することで、自然の豊かさやその重要性に気づくことができます。例えば、学校で自然観察会などを企画し、近くの公園や山に出かけて植物や動物を観察する活動は、自然とのつながりを深める良い機会です。また、地域の自然保護団体などが開催するイベントに参加し、自然環境について学びながらボランティア活動を行うこともできます。こうした活動を通じて、自然環境の大切さを実感し、自分たちにできることを考えることが重要です。

次に資源を無駄にしない行動をすることです。目標15の達成には、私たちの日常生活の中で資源を無駄にしない行動が求められます。特に、紙製品や木材製品の使用に関して意識を持つことが大切です。森林は地球上の生態系において非常に重要な役割を果たしており、私たちが使う紙や木材の多くは森林資源から得られています。そこで、無駄な紙の使用を減らすために、両面印刷を心がけたり、電子機器を活用してペーパーレス化を進めたりすることができます。また、木製品や紙製品を買う際には、

環境に配慮した製品を選ぶことも一つの方法です。学校でも、資源の無駄遣いを防ぐための取り組みを進めることが可能です。例えば、学校行事で使われる装飾品を再利用可能な素材にする工夫も考えられます。私たち一人ひとりが意識を持ち、小さな行動を積み重ねることで、地球の資源を守ることができます。

次に自然環境保護の活動に参加することです。高校生として、私たちができる具体的な行動の一つに、自然環境保護のための活動に積極的に参加することがあります。地域で行われている植樹活動やごみ拾いなどのボランティア活動は、私たちが直接的に自然環境を守るための機会となります。自分もごみ拾いのボランティアの活動は何回か参加したことがあり、一人ひとりが少しでも参加することで自然環境の保護に貢献することができます。例えば、自分が参加したボランティアでは夏休みに2回ほどごみ拾いが行われています。このような活動に自分ひとりで参加するのも良いですが、家族や友達、またはクラブの活動の一環として参加することで、私たち自身が自然環境に対する責任を感じ、行動することができます。さらに、SNSやブログを活用して、自分たちの活動を発信することもできます。自然環境保護の重要性や自分たちが取り組んでいる活動を広く知らせることで、多くの人々に自然環境保護の意識を持ってもらうきっかけを作ることができます。情報を発信することで、他の学校や地域の人々にも影響を与えることができるのです。

最後に環境に配慮した生活を送ることです。日常生活の中でも、環境に配慮した選択をすることが目標15に貢献する一つの方法です。例えば、普段の買い物では、環境に優しい商品を選ぶことや、プラスチック製品の使用を減らすことが挙げられます。また、使い捨てのものではなく、再利用可能なものを選ぶことも大切です。

SDGsの目標15「陸の豊かさも守ろう」は、自分の地域は自然が豊かなので忘れがちかもしれませんが、自然が豊でなくても、豊かであっても自然を大切にすることというのは大切です。私たち一人ひとりの行動が小さくあっても、それが積もっていき未来の地球環境を守るための大きな力となります。高校生としてできることから始めて、持続可能な社会を築いていきましょう。

2024 年度募集要項

第 64 回「国際理解・国際協力のための中学生作文コンテスト」山口県大会

- ◆ **テーマ** 作文の題目は、「①よりよい未来に向けてあなただったら国連の場で何を訴えたいか。」、「②世界の平和のために私たちができることは何か。」又は「③持続可能な開発目標（SDGs）の進捗をどう評価し、さらなる努力が必要と考える点は何か。」のうちいずれか一つとします。なお、作文の内容は、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などを通して、国際連合について述べたものとします。
- ◆ **応募資格** 県内在住又は在学の中学校生徒または左記に準ずる在日学校在学生
- ◆ **原稿制限** 400字詰め原稿用紙 4 枚以内
- ◆ **賞** 特賞：2 名、優秀賞：2 名、特別賞：2 名（副賞：図書カード、参加賞：文房具等）

第 31 回「高校生による SDGs に関する感想文コンテスト」

- ◆ **テーマ** 題目は自由。作文の内容は、持続可能な開発目標（SDGs）のうち、いずれか一つを選択し、選択した開発目標について、学校、家庭、社会などにおける執筆者の学習や体験あるいは実践などについて述べたものとします。

持続可能な開発目標（SDGs）

「誰一人取り残さない」持続可能で多様性と包摂性のある社会の実現のため、2030年を年限とする 17の国際目標

- | | |
|----------------------|-----------------|
| ① 貧困をなくそう | ② 飢餓をゼロに |
| ③ すべての人に健康と福祉を | ④ 質の高い教育をみんなに |
| ⑤ ジェンダー平等を実現しよう | ⑥ 安全な水とトイレを世界中に |
| ⑦ エネルギーをみんなにそしてクリーンに | ⑧ 働きがいも経済成長も |
| ⑨ 産業と技術革新の基盤をつくろう | ⑩ 人や国の不平等をなくそう |
| ⑪ 住み続けられるまちづくりを | ⑫ つくる責任つかう責任 |
| ⑬ 気候変動に具体的な対策を | ⑭ 海の豊かさを守ろう |
| ⑮ 陸の豊かさを守ろう | ⑯ 平和と公正をすべての人に |
| ⑰ パートナリシップで目標を達成しよう | |

- ◆ **応募資格** 県内在住又は在学の高等学校生徒（全日制、定時制、通信制）、高等専門学校生徒（ただし、3年生まで）
- ◆ **原稿制限** 400字詰め原稿用紙 5 枚以内
- ◆ **賞** 特賞：2 名、優秀賞：2 名、特別賞：2 名（副賞：図書カード、参加賞：文房具等）

共 通 事 項

- ◆ **締切及び審査と発表**
令和 6 年 9 月 4 日（水）必着。主催団体において審査し、10 月下旬に入選者に連絡します。
- ◆ **応募作品の取り扱い**
① 応募作品は返却しません。② 入賞作品の著作権は、主催団体に帰属します。③ 作品は自作・未発表のものに限ります。④ 中学生による作文の上位入賞作品については、全国コンクールへ出品します。
- ◆ **個人情報について**
応募者の個人情報については、応募者の選考、連絡のために利用します。これらの目的の他に応募者の個人情報を利用することはありません。
- ◆ **応募先・お問い合わせ先**
〒753-8501 山口市滝町 1-1 山口県観光スポーツ文化国際課内
日本国際連合協会山口県本部 TEL 083-933-2347 <https://unaj-yamaguchi.sakura.ne.jp/>

令和6年11月発行

発行元

日本国際連合協会山口県本部

〒753-8501 山口市滝町1-1

山口県観光スポーツ文化部国際課内

TEL (083) 933-2347



日本国際連合協会山口県本部